

TS（トータル・サティスファクション）を目指して M14

「自分で考える力」を育むために

校長室担当より

今年度は、「自分で考えて、判断し、主体的に行動する力」の育成を主眼においてきました。なかなか、難しいお題ですが、この中でも、私の目指す「学力」とは、ずばり「自分で考える力」です。これがすべての基本だと考えています。ところが、高等学校の従来の教育では、どうしても認知的な「大学入試に合格する力」を学力ととらえてしまい、生徒を引きずってでも勉強を強いるという考え方も一定数見受けられます。

マクドナルドホールディングズ代表取締役社長兼CEOである日色保さんは、次のように指摘されています。経済同友会のある企業が、1500人の社員の業務業績と出身校の偏差値の相関を調べてみたら、見事に相関はなかったとのこと。「いい（＝偏差値の高い）大学に行ったら活躍できるか」というと、今はいろんな会社を変わっていく世の中になっていて、その中でちゃんとついていく能力こそが大切。いい大学に行ったらけれど、逆に社会では使えない人間を生み出している可能性がある。いい大学に行くことがいい、というフレームワークから私たちはもう離れる必要がある。」と語っておられます。さらに慶応大学教授の中室牧子さんもこのように語っておられます。「経団連が出している新卒の採用で重視する能力の第一位は、16年連続でコミュニケーション能力。このように、大人になってから重要なスキルは何かということを誰もが知っているのに、子どもを育てるときにはなぜかテストの点数になってしまい、受験のアウトカム（結果）に夢中になってしまうという矛盾がある。」

そんな状況の中で、私たち学校教育に携わる者がすべきなのは、教師側が「こうしなさい」と失敗しないようにすぐに指示したり、「早く早く」と正解を記憶させるのではなく、「受け入れられている」と生徒が体感できるような（授業内）環境をつくり、「失敗してもいいからやってみて」と声をかけ、それでも動けなければ、「何をしたい？」「どうしたい？」「どうしたらいいと思う？」「そのために私（教師）は何ができる？」と常にコーチングしていくことなのです。答えがすぐに返ってこなくても構いません。それでも生徒は考えています。この手間を省くと、「自分で考える力」はつきません。まず目指すものは「覚えさせる」ことではなく「考えさせる」ことなのです。（令和7年3月10日）